

教育の聖地・芝山巖を歩く

片倉 佳史

台北市の北郊。終戦まで芝山巖（しざんがん）と呼ばれていた芝山岩は夜市（ナイトマーケット）で知られる士林に近い場所にある。台北盆地の北側にある小高い丘で、背後には景勝地・陽明山を従えている。今回は台湾史の舞台となったこの場所を紹介してみよう。

台北郊外の景勝地・芝山公園

台北からバスに揺られること、30分あまり。こもりと樹木に覆われた芝山公園に着く。ここは小高い丘となっており、見晴らしの良さで知られている。早朝には体を動かす人々が集まり、結構な賑わいだ。ガイドブックなどで紹介されることは少ないが、台北市民における知名度はそれなりに高い散策地である。

ここは終戦まで「芝山巖（しざんがん）」と呼ばれていた。台湾における教育の聖地とされ、終戦前に台湾と関わった人であれば誰もが知っていた場所である。特に、教育に携わる者は必ずやここを訪れ、参拝したという。

公園入口には125段という石段がある。これは



台北の町並みが一望できる芝山巖。現在は芝山岩、もしくは芝山公園と呼ばれている。恵濟宮の前には広場があり、そこからの眺めは素晴らしい。

戦後に廃社となった芝山巖神社の石段で、山肌を一直線に貫いている。神社の本殿や拝殿は撤去されたが、石段は今も使用されている。

現在、神社の神苑は公園として整備され、「芝山公園」と呼ばれている。

台湾に存在した「教育の聖地」

1895（明治28）年、台湾領有に際し、台湾総督府は教育体制の整備を急いだ。当時、最優先されたのは治安の安定と統治制度の確立、衛生状態の改善だったが、これらと並び、教育面の整備も重要視されていた。それは、言うまでもなく台湾統治の素地を作るにあたって不可欠だったからである。そういった意味では、「教育」というよりも、「教化」と言ったほうが適切かもしれない。

領台初年。文部省の官吏であった伊沢修二が教育面における責任者として台湾に赴任する。台湾割譲が決まった時点で、伊沢は初代台湾総督に内定していた樺山資紀（かばやますけのり）に対し、教育を最優先することを強く主張。これが受け入れられて、自ら学務部の長となった。

伊沢は近代日本の音楽教育の祖と称される人物である。東京師範学校校長や東京音楽学校初代校長などを歴任、教育界の先駆的役割を果たしている。特に教員養成や音楽教育、盲啞教育などの分野を精力的に切り開いた。また、小学唱歌を編集し、初等教育に音楽を導入したという功績もある。

伊沢修二という人物

伊沢は1851年6月30日、長野県の高遠（たかとお・現伊那市）に生を受けている。父は高遠藩の藩士であったが、生活は厳しかったという。それでも藩校である進徳館で学を修め、1867年に江戸へ上京。京都では蘭学を学んだという。

1872年からは文部省に入り、1874年には23歳で愛知師範学校の校長となる。翌年には師範学校制度の調査でアメリカ留学を果たす。当初はマサチューセッツ州のブリッジウォーター師範学校に入り、電話の発明者であるグラハム・ベルに視話術を学び、ルーサー・メーソンからは西洋音楽を学んでいる。その後はハーバード大学に進み、理化学のほか、地質研究などを行ない、聾啞教育についても修めている。

1878年に帰国した後は東京師範学校の校長となり、1888年には東京音楽学校初代校長になるなど、明治の教育界になくてはならない人材となっていた。

伊沢が絡んだ教員養成や言語教育学、初等教育における音楽教育、盲啞教育などは、いずれも日本では未開拓の分野であり、パイオニアとも言える存在である。

とりわけ、音楽に関しての功績は大きい。アメリカで「音楽」という世界を知った伊沢は、これを日本に導入することを考えた。恩師であるメーソン（日本へ最初に洋楽を伝えた人物）を招き、「唱歌」を数十曲作り上げた。これは古来の邦楽でもなく、西洋音楽でもない独自のもので、児童教育になくてはならない存在となっていた。

興味深いエピソードとしては、1877年1月に、伊沢はハーバード大学で、電話の発明者であるグラハム・ベルの通話実験に立ち会っている。この時、伊沢は受話器を手渡され、留学仲間の金子堅太郎（大日本帝国憲法の起草者の一人で後の司法大臣や農商務大臣。日本大学の初代校長）に向か

い、「申します申します」と話しかけたという。これが「もしもし」と聞こえ、その後、日本に定着した。また、電話機を使った世界最初の通話が英語で、次は日本語だったという事実も興味深い。

「蛍の光」と「仰げば尊し」

1881年に編纂された『小学唱歌集』はもちろん、伊沢が手がけた歌曲は今も数多く親しまれている。その中でも、とりわけ広く知られているのは、やはり「蛍の光」と「仰げば尊し」であろう。

「蛍の光」は『小学唱歌集』の初編に掲載されている。スコットランドの「オールド・ランク・サイン」という曲が原曲であるとされている。長らく作詞者、作曲者ともに不詳とされていたが、現在は作詞については、歌人であり、国学者でもあった稲垣千穎（いながき・ちかい）が担当したというのが有力である。1962年からは教科書に作詞者として稲垣の名が出るようになっていたが、作曲者は今も不明のままである。なお、この曲は当初、「蛍」という名だったが、後に「蛍の光」となった。唱歌に編入されたのは1881年のことである。

「仰げば尊し」は作曲・作詞者不詳のスコットランド民謡である。1884年に伊沢がこれを唱歌として取り入れたものだが、この曲自体、伊沢自身の作詞・作曲であるとする説も存在している。事実関係を断定することはできないが、興味の尽きないエピソードである。

また、「蛍の光」の歌詞にも隠れたエピソードがある。1881年11月24日付けの『小学唱歌集』初編に掲載された歌詞は4番までである。

蛍の光（1881年11月編纂時）

1

蛍の光 窓の雪

書(ふみ)読む月日 重ねつつ

何時(いつ)しか年も すぎの戸を

開けてぞ今朝(けさ)は 別れ行く

2
止まるも行くも 限りとて
互いに思う 千萬(ちよろづ)の
心の端(はし)を 一言(ひとこと)に
幸(さき)くと許(ばかり) 歌うなり

3
筑紫(つくし)の極(きわ)み 陸(みち)の奥(おく)
海山遠く 隔(へだ)つとも
その真心(まごころ)は 隔(へだ)て無く
一つに尽くせ 国の為(ため)

4
千島(ちしま)の奥も 沖繩も
八洲(やしま)の内の 護(まも)りなり
至らん国に、勲(いさお)しく
努(つと)めよ我が背 恙(つつが)なく

4 番の歌詞は日本の領土変遷によって、歌詞が変わっている。当初は冒頭が「千島の奥も沖繩も」だったが、下関条約による台湾割譲を受け、「千島の奥も台湾も」となり、さらに、日露戦争後は「台湾の果ても樺太も」となっている。

現在の学校教育では2番までしか唄わないというのが通例になっており、3番と4番はほとんど知られていない。これは戦後、歌詞の内容が時流に合わないという主張が起こり、実際に、千島や沖繩が他国の占領下に置かれ、台湾や樺太の領有権を放棄した関係上、事実にもそぐわないという状況があった。

そして、歌詞そのものが日本中心の思想で、これが国粹主義的思想とも読みとれることから、教育の現場などで敬遠されていった。「外地」と呼ばれていた辺境の地を含め、どんな状況下にあっても国に尽くし、国民それぞれが自らの役割を果たそうと呼びかけることが軍国主義的だと明言する教育者も出ていた。

なお、4番の歌詞にある「至らん国に勲しく」という解釈は、「いたらない国(←不遜な国、敵国、野蛮な国、後進国)」、「いたる国(←派遣される先の地、国)」、「いたらん! お国に(←勲しく戻ろう! ふるさとへ)」などという解釈も存在し、焦点となった。

さらに余談ながら、3番の歌詞は当初、以下のようになっていた。

筑紫(つくし)の極(きわ)み 陸(みち)の奥(おく)
別るる道は 変わるとも
変わらぬ心 行きかよい
一つに尽くせ 国の為(ため)

これは唱歌集出版時に文部省のチェックが入り、第三節の「変わらぬ心行きかよい」の部分が男女の交際を匂わす不届きな印象ということで、改められたという。これにより、奥付の日時から半年が過ぎた1882年4月に、半年遅れで唱歌集は刊行されることとなった。

日本統治時代が始まる

台湾割譲が決まった1895(明治28)年。伊沢は5月21日に台湾総督府学務部長心得に任ぜられている。そして、6月7日に宇品から京都丸に乗りこみ、台湾を目指した。この京都丸は領台後、台湾に向かった第三番目の船であり、主に文官が乗り込んでいた。

伊沢が基隆に到着したのは6月12日だった。この台湾行には日時に異説も存在しているが、17日に挙行された台湾総督府の始政式に参列するべく、16日までに台北へ到着したのは確かなようだ。始政式では米国留学で培った英語を駆使し、英国領事の祝辞を通訳している。そして、18日、台湾総督府学務部は事務を開始している。当初は大稲埕の豪商・李春生の邸宅に仮の事務所が設けられていた。

その後、伊沢は6月26日、学務部を台北の北側に位置する八芝蘭（現士林）に移す。ここが芝山巖である。実際に日本語教育が始められたのは7月16日からだったが、これは植民地教育の嚆矢であり、外地に置かれた最初の教育機関でもあった。そして、最初の日本語教育の現場でもあった。

伊沢は士林一帯の有力者を集め、8月に正式な募集を行なっている。9月の時点では21名の生徒がいたという。そして、10月19日には第一期生の7名に最初の修了証書が授与されている。

当初、芝山巖で伊沢とともに教育にあたったのは、吉田松陰の甥にあたる楫取（かとり）道明をはじめ、井原順之助、関口長太郎、山田耕造、中島長吉、桂金太郎、平井数馬などであった。ただし、この時期の人員配置は変動が大きく、必ずしも一定はしていない。

伊沢は台湾を植民地というよりは新附の領土であるという考えを抱き、その教育姿勢も日本人と台湾人が相互に理解しあい、混和していくことを理想としていた。そのため、教師となった日本人と台湾の学生は寝食を共にしていたという。

こういったあたり、フランスが宗主国の言語や文化を植民地に押しつけ、イギリスが住民間の争いを利用し、愚民政策を敷いたのとは大きく異なっているといえよう。

また、先にも触れたように、日本が進出した先の地でも教育勅語を普及させ、日本語をアジアの公用語に仕立てていくという理想も持っていた。これは国家主義教育にも繋がり、教育による同化、皇民化という一面も否定できないが、ここでは触れない。しかし、この時代ですでに、国外へ目が向いているあたり、伊沢という人物の個性が際だっているようにも思えてくる。

その後、10月25日に伊沢は初代台湾総督の樺山資紀とともに台南へ赴き、宣教師パークレーに会っている。その後、10月29日に帰京し、日本最初の日本語教材と言われる『日本語教授書』と

いう書物とともに台湾へ戻ったとされている。

芝山巖事件の勃発とその背景

芝山巖の学堂は山頂に位置し、恵濟堂という廟に設けられていた。現在、廟そのものは新しい本堂が完成しており、往年の様子をとどめていないが、当時はここで日本語教育についての研究が行なわれ、教科書の編纂も進められていた。そして、伊沢自身、新領土において、いかに教育制度を構築していくか、考究を続けていたという。

当時、台湾では日本への割譲に反対する勢力が激しい抵抗を続けていた。民衆は寝耳に水だった日本統治を受け入れるはずがなく、武器を手にとって、激しい抵抗を繰り広げた。まさに全島が戦火に包まれた状態であった。

この地も決して安全な場所ではなかったが、伊沢たちは学堂に泊まり込んで作業に没頭したという。日本統治時代の文献によれば、「身に武器を持つことなく民衆の中に入っていかなければ、教育というものは出来るものではない。もし我々が襲われて、殉ずることがあっても、台湾子弟に日本国民としての精神を具体的に見せることができる」という言葉を残し、死を覚悟した上で、その場に居座ることを決めていたという。

事件は領台の翌年、1896年の元旦に起こった。士林一帯の叛乱勢力が元旦を期して蜂起したのである。不穏な動きを察知した人々は、繰り返し日本人教員たちに避難を勧めたという。

この時、伊沢と山田耕造は上京中で台湾に不在だった。その留守を守っていた楫取（かとり）道明以下、6名の教員たちは台湾総督府で挙行された新年の祝典に参列するべく、市内へ向かっていた。基隆川の渡船場までは来たものの、台北城内周辺はすでに匪賊の包囲を受けており、近づくことは不可能だった。

台北城に入れないことが分かった一行は、士林の警察官吏派出所へ向かった。そこで士林一帯も

また、非常に危険であることを知らされる。とりわけ、芝山巖は襲撃対象となっており、ここでも退却を勧められたという。

しかし、楫取の答えは、「死して余榮あり、実に死に甲斐あり」というものだった。たとえ、説得の利かない相手であっても、もし、逃げてしまえば、臣子の道はずすことになる。そういつて、教員たちはゲリラによる襲撃を知りながら、教育者として説得にあたることを選んだ。

そして、約 100 名とも言われるゲリラの襲撃を受けることになる。6名の教員と用務員の小林清吉はむなしくも惨殺されてしまった。台湾総督府が残した資料によれば、ゲリラに囲まれた際、教員は諄々と教育の意義を説き、一時は彼らを説得できたと言われるが、結局のところ、聞き入れられることはなく、襲われてしまった。

この時、匪賊たちの間には、日本人の首を取れば賞金がもらえるというデマが流れていたと言われ、惨殺に及んだという。そして、学堂内の備品や衣服、所持品などを奪い、逃走していったという。

その後、1月8日に総督府職員が教員たちの亡骸を收容するべく、当地に赴いているが、その際、教員たちの遺体は学堂近くに埋められていたという。これは壮絶な最期を不憫に思った住民たちによって埋葬されたものだった（平井数馬と小林清吉の遺体は見つからず）。これは、ほんのわずかな期間ながら、地元住民たちとの関係が築かれていたことを示す小さなエピソードといえよう。

この事件は大きく報じられた。その見方は、犠牲者は台湾で教育に生命を捧げた聖職者。そして、襲ったのは悪辣を極めた匪賊の輩。新領土に命を捧げ、殉職した6名の教員は英雄となり、そのエピソードは美談として広く紹介された。

その後、芝山巖は「教育の聖地」とされ、殉職教員は「六士先生」と呼ばれるようになった。そして、命をかけて教育に当たるといふ姿勢が「芝

山巖精神」と称され、終戦まで、台湾教育界の指針とされた。

学校教育の場では必ずと言っていいほど、六士先生のエピソードが教えられ、教科書や副読本にも盛んに登場していた。戦前の台湾に生まれた人々は、幼少時代、毎年1月1日に挙行される慰霊祭や2月1日の神社例祭日に参列したり、遠足でこの地を訪れたりした人が多い。まさに、芝山巖事件は台湾史を知る上で、見落とすことができないものと位置づけられていた。

以上が芝山巖事件の大まかな概要である。

六士先生の歌

作歌：加部巖夫 作曲：高橋二三四（ふみよ）

1

やよや子ら はげめよや
学べ子ら 子供たちよ
慕へ慕へ 倒れてやみし先生を

2

歌へ子ら 思へよや
すすめ子ら 国のため
思へ思へ 遭難六士先生を

芝山巖神社創建

その後、ここには神社が創建された。

この神社は昭和天皇の即位を記念して、創建が建議されている。造営は1930（昭和5）年1月15日に終わり、ここに芝山巖神社が誕生した。遙拝だけを目的とする神社で、社格はなかった。しかし、本殿や拝殿、鳥居、参拝記念碑などを擁し、規模の大きな神社であった。資金は台湾の教育関係者による寄付により、金2万円が投じられたという記録が残る。

この神社には台湾の教育に殉じた人々が合祀されていた。その数は1933（昭和8）年までに330名となり、その中には、台湾人教育者24名も含ま



日本統治時代の芝山巖神社の様子。毎年2月1日に台湾教育会によって慰霊祭が行なわれていたという。奥に学務官僚遭難之碑が見える。日本統治時代に発行された絵葉書より。



日本統治時代の士林駅に置かれていたスタンプ。後方の大きな山は草山(現陽明山)の紗帽山。その手前にある小さな丘が芝山巖だ。「盆地に浮かんだ丘」という地勢が巧みに表現されている。

れていた。こういった個人たちが神社の祭神となることは、当時としては珍しいケースであった。

台湾の教育事業に従事する者はほぼ例外なくここを参拝したと言われる。中でも台湾の学校で教鞭をとる者は、籍を問わず、参拝を繰り返したという。

たとえば、台中県の清水(きよみず)には、赴任した学校長(日本人)が、芝山巖参拝時に持ち帰った自然石を校内に安置したというエピソードが存在する。言うまでもなく、これは児童に「芝山巖精神」を伝えるという名目だった。石の表面には「誠」という文字が刻まれており、現在も校舎の正面に置かれている。

終戦後の芝山巖と現在

1945(昭和20)年、ポツダム宣言を受諾した日本は領有権を放棄し、台湾・澎湖地区の管理は中華民国国民党政府に委ねられることとなった。これによって、すべての歴史観は逆転してしまう。

1958年、国民党政府が石碑を建てている。その「芝山巖事件碑記」の内容は、日本人が語り継いできたものとは正反対になっている。例えば、惨殺された教員は侵略者の手先とされ、日本人を襲った「匪賊」は「抗日義士」へと扱いが変わっている。

こういった記述は外来の為政者が自らを正当化するためのものだが、盗賊集団と言うべきゲリラを義士と呼ぶにはあまりにも無理がある。さらに、この碑文の撰者が採訪したという潘光楷氏もまた、数々の誤謬と誇張があると証言している。

その後、強圧的な排日政策下、芝山巖に設けられていた全4基の石碑は倒され、この場所は反日教育の場として利用されるようになった。また、「六士」には数えられなかった用務員の小林清吉君についても1936(昭和11)年に「軍夫小林清吉君之碑」が建てられたが、これも撤去されている。

神社は終戦を迎え、撤去された。神社跡を訪ねてみると、拝殿や本殿があった場所は推測できるが、痕跡は残っていない。

拝殿跡には中国式の東屋が建っており、本殿跡には図書室が設けられ、自習室として利用されている。それでも、石段が往時の面影を残しており、拝殿や本殿の位置関係は容易に理解できる。付近を丹念に探してみると、石灯籠の破片らしきものも見受けられる。

本殿跡に建てられている図書室は雨農図書室という看板が掲げられている。「雨農」とは優雅な響きの文字だが、これは蒋介石の側近で、中華民国軍人の戴笠を意味している。「雨農」とは戴笠の字である。

戴笠は蒋介石一派の中、特務機関のトップとして君臨していた。国民党内では相当な力を持っており、「中華民國のハインリヒ・ヒムラー」と揶揄された。しかし、1946年3月17日、青島から南京へ向かう途中、謎の飛行機事故に遭って死亡している（これは事故死説ほか、暗殺説、米軍による謀殺説などがある）。

なお、拝殿跡の脇には、注目すべき遺構がある。それは時の内閣総理大臣・伊藤博文が揮毫した「學務官僚遭難之碑」である。石碑は高さが約3メートル、幅60センチという大きなものである。

用材には安山岩が用いられ、表面には「學務官僚遭難之碑」の文字、後面には以下の文字が刻まれている。

「台灣全島歸我版圖革故鼎新聲教為先正五位楫取道明等六人帶學務派八芝蘭士林街專從其事會土匪蜂起道明等死之時明治二十九年一月一日也内閣總理大臣大勳位侯爵伊藤博文書」

また、側面には命を奪われた教員の名が、山口県華族・楫取道明、愛知県士族・関口長太郎、山口県士族・井原順之助、群馬県平民・中島長吉、東京府平民・桂金太郎、熊本県平民・平井数馬とある（用務員だった小林清吉の名はない）。

石碑は伊藤博文が1896（明治29）年7月に台湾を訪れた際、揮毫したもので、周囲からは「殉難」の文字を入れてほしいという申し出があったというが、伊藤は「遭難」と入れたという。こういった用語の選び方からも統治者の考え方がいかなるものだったかを知ることができる。

戦後、この石碑も国民党政府によって引き倒され、大きなベンチのようになっていた。しかし、郷土の歴史を物語る遺構として、2000年、台北市文化局は再びこれを建て直すことを決定した。長らく地面に接していたこともあって、文字の状態は皮肉にも良好だ。伊藤博文の名もはっきり確認

できる。

しかし、外省人勢力をはじめ、一度倒した石碑を立て直すことをよく思わない人々がいるのも事実である。建て直された石碑は直後に過激派によって落書きがなされるなど、事件が絶えない。また、雨農図書室にも簡単な展示があるが、これもまた、馬英九市長時代に設けられたもので、内容に偏りが見られる。

なお、図書室の後方に回ってみると、台湾の地で殉職した教師たちの名が刻まれた石碑が残って



芝山巖神社の跡地。現在、神社関連の建造物は残されていないが、拝殿や本殿の位置関係ははっきりしている。写真は拝殿跡に建てられた東屋から本殿跡を眺めた様子。本殿跡には図書室が設けられている。



拝殿へ向かう石段。整備はされているものの、日本統治時代の位置関係は変わっていない。鳥居や参拝記念碑などは撤去されている。



陳水扁市長時代に建て直された石碑。当時、客観的な歴史評価を推し進める機運が高まったことを受けてのものだったが、直後に外省人過激派による落書きがなされてしまった。



図書室後方には殉職した教育関係者の姓名が記された石碑がある。一度はたたき壊されたが、つなぎ合わせてある。傍らには破片が今も残っている。



日本統治時代の様子。石碑が3基並んでいる。後に殉職者が増えたため、石碑の数は増えている。

いる。これは「台湾亡教育者招魂碑」と「故教育者姓名碑」だが、一度はたたき壊されており、長らく遺棄された状態になっていた。現在は元の様子に戻されているが、周辺には今も石碑の破片が散乱している。

歴史の舞台を訪ねる意義

1995年に芝山巖学堂は開設百周年を迎えた。芝山巖学堂の後身と位置づけられる士林公学校（後の士林国民学校・現台北市士林国民小学）の卒業生有志は、これを記念して、六士先生の碑を建てた。この時には、日本からも関係者が出席し、盛大な式典が催されたという。

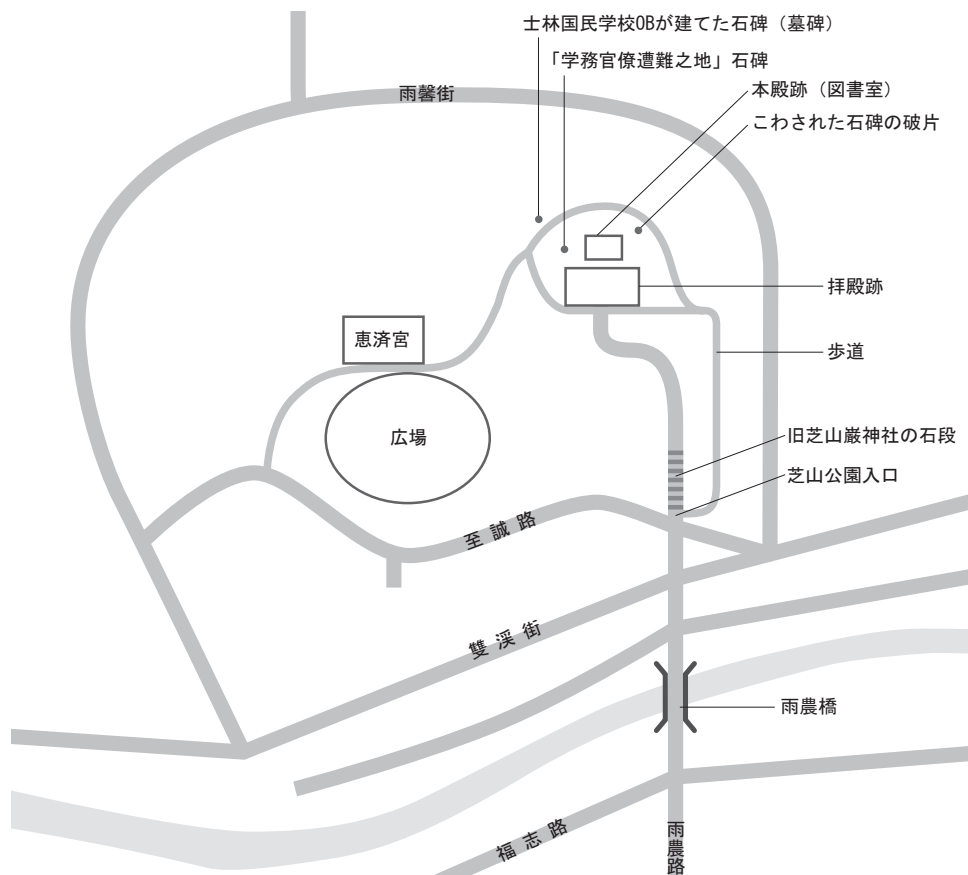
石碑は墓碑といったほうが適切で、表面にも「六氏先生之墓」と刻まれている（※1）。氏名や由来などは一切書かれていない。1995年と言えば、わずか15年前のことである。この時代、まだまだ歴史への客観的評価が難しかったことを暗に示しているような存在だ。

芝山巖を取り巻く状況は、時の流れとともに常に揺れ動いてきた。しかし、豊かに生い茂った緑だけは、いつの時代も美しさを競っており、人々の目を楽しませてくれる。恵濟宮からは台北盆地が一望でき、この眺めを楽しむためにやってくる人々も少なくない。

近代化を成し遂げ、様変わりした台北の町並みを前に、台湾で繰り広げられてきた歴史をたどってみるのは興味が尽きない。台北市内からタクシーを利用すれば、わずか20分あまりなので、散策を兼ねてぜひ訪れてみたい場所である。

※1

墓石には「六氏先生」と刻まれているが「六士先生」が当時の表記であった。現在は六氏先生の呼称が一般的に使用されている。



片倉 佳史：1969年、神奈川県生まれ。早稲田大学教育学部教育学科卒業後、出版社勤務を経て台湾と関わる。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックは20冊を数え、地理・歴史、原住民族の文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けている。著書に『台湾鉄路と日本人』（交通新聞社）、『台湾に生きている「日本」』（祥伝社）、『観光コースでない台湾』（高文研）、『旅の指さし会話帳・台湾』、編著に『新個人旅行・台湾、台北』（昭文社）などがある。ウェブサイト台湾特捜百貨店（<http://katakura.net/>）を主宰。